





# 新収蔵資料紹介

2021.2  
▼  
2022.1

## 県内初の高等女学校創設

### 細見保の功績を伝える

「細見聡家資料」

細見保(1858~1936)は、

京町に生まれ、9歳で藩校明善堂に入門、長崎師範学校卒業後は各地の小学校校長を歴任します。明治30年(1897)に久留米高等女学校を創設、同33年には久留米図書館を開設しました。その没後、彰徳会が発足し、遺稿などの資料を集め、教育に一生を捧げた彼の功績を伝記にまとめました。

太平洋戦争のため、伝記は刊行さ



昭和9年、久留米高等女学校落成式の歴代校長。前列右が細見保



細見保の傳記。「緒言・目次・年譜・遺著・弔祭」「教化事業」「性行・趣味・逸話」の3冊からなる

## 河童、そろばん、火の用心

### 記念品に込めた久留米の思い

「森久家資料(第2次)」

昭和30~50年代に、市内の催事で配られた記念品です。

久留米の夏の風物詩「水の祭典」の手ぬぐいは、毎年図柄が変わります。昭和53年の河童、同57年の算盤は、それぞれ筑後川の河童伝説と、祭典のそろばん総踊りに因んだものです。

昭和37年の消防展の風呂敷には火消しの纏の絵に「火の用心」、同41年の石橋文化センター開園十周年記念手ぬぐいには「世の人々の楽しみと幸福の為に」という石橋正二郎の言葉が記され、強いメッセージを放っています。



昭和53年「水の祭典」の手ぬぐい。河童の親子がデザインされている

## 「米空軍は爆撃します」

### 「避難してください」

「鶴田家資料(第2次)」

戦争中、敵の戦意を喪失させたり、投降を促したりするために配られるビラを「伝単」といいます。

太平洋戦争の末期、戦場となった日本にもさまざまな伝単が舞いました。その一つが「日本国民に告ぐ」です。

あなたは自分や親兄弟友達の命を助けようとは思ひませんか 助けなければこのビラをよく読んで下さい

この一文に続いて、米空軍による軍事施設の爆撃を予告し、避難を促します。この時、爆撃の候補地には、「久留米」も挙がっていました。



「国民に告ぐ」の裏面には、爆撃機の写真が掲載され、爆撃候補地として「久留米」が記されている

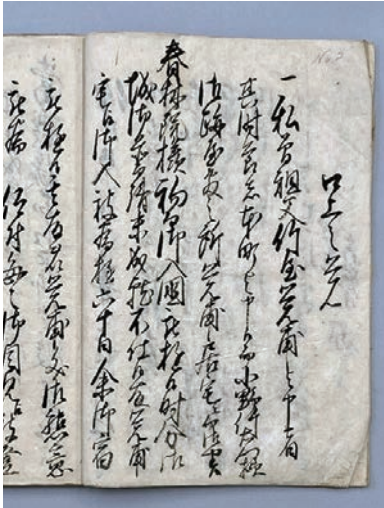
## 久留米の在地商人

### 新藩主が築いたつながり

「吉武家資料」

吉武家の先祖は、久留米藩初代藩主として有馬豊氏が入国して来る元和7年（1621）より前から、久留米の地で商人をしていました。屋号は「竹屋」といい、のちに分かれて「伏見屋」を起こします。18世紀中頃から「吉武屋」の号を用いるようになってきました。

正徳3年（1713）の「御公儀江願書写自分覚書」という記録によると、豊氏初入国の頃、竹屋は本町（現篠山町）に居住していました。久留米城の御殿ができるまでの間、竹屋覚甫は豊氏を60日余り宿泊させたといえます（他説あり）。



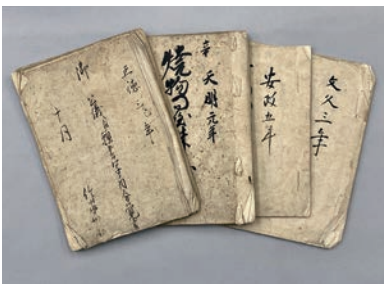
「御公儀江願書写自分覚書」。「覚甫宅へお入り遊ばされ、六十日余り御宿」と記されている

やがて本町は久留米城内に取り込まれることになり、竹屋は三本松町に移住しました。覚甫は豊氏と懇意になり、たびたび謁見するため登城しました。

また、覚甫の孫の太郎右衛門は、2代藩主・忠頼の「御能」の際、狂言を演じるよう命ぜられました。以来、この「御嘉例（めでたい先例）」によって、太郎右衛門は毎年、「御松離子」の際に登城して祝いを述べ、芸を演じたといえます。

記録を紐解いていくと、他所から移ってきた新しい藩主有馬氏が、在地商人と関係を築いていく過程がかがうことができます。

あわせて、伏見屋の焼物問屋商売や、三本松町の町人に関する記録の寄贈を受けました。



吉武家資料。正徳4年（1713）～文久3年（1863）の計4点

## 新収蔵資料一覧

日付	資料名	点数	氏名	区分
2・15	フィルム	13	—	採集
3・24	森久家資料（第2次）	11	森久	寄贈
3・26	細見聡家資料	22	細見聡	寄贈
5・20	武田博子家資料	38	武田博子	寄贈
5・24	田主丸町航空写真フィルム	3	—	採集
5・31	ゼンリン住宅地図	11	—	採集
6・7	武谷家資料（第2次）	50	武谷茂	寄贈
6・7	藏守家資料	26	藏守香織	寄贈
6・7	西分館採集資料	87	—	採集
6・14	通告表	5	—	採集
6・14	福光村大庄屋内田家墓地改葬写真	2	—	採集
9・24	観光絵はがき	7	匿名	寄贈
9・24	鶴田家資料（第2次）	32	鶴田俊一	寄贈
10・6	甲冑	1	城島小学校	移管
10・6	地図	1	Paul Kawachi	寄贈
10・6	平田家資料	133	平田孝之	寄贈
10・11	吉武家資料	4	吉武修一	寄贈
12・10	橋本氏コレクション	3	匿名	寄贈
12・8	歴史教科書	3	—	採集
12・8	ダブルカセットデッキ・一眼レフカメラ (35mm)	2	—	採集
12・10	渡辺家資料	4	—	採集
12・13	宇都宮家資料（第2次）	2	匿名	寄贈
12・20	当世具足	1	日吉小学校	移管
1・13	ナショナル自動アイロン	1	久保山隆吉	寄贈

# 六ツ門図書館展示コーナー

〒830・0031 久留米市六ツ門町3-11  
くるめりあ六ツ門5階  
TEL: 0942・277・9281  
FAX: 0942・277・7281

## 発掘でよみがえる 久留米城下町展

会期：令和3年8月21日（土）

～11月3日（水・祝）

現代の都市・久留米の礎である久留米城下町の整備が始まったのは元和7年（1621）、久留米藩21万石の初代藩主・有馬豊氏の初入国がきっかけでした。それから400年の節目にあたる令和3年、「久留米入城400年記念」として、埋蔵文化財の発掘調査の成果から久留米城下町の歴史を紐解く企画展を開催しました。

久留米市が久留米城下町跡の本格的な調査に着手したのは、平成元年（1989）のことでした。当時まだ全国でも江戸時代の城下町を対象にした発掘調査は少なく、その成果は大きなニュースとなりました。あれから30年余り、130地点の調査によって、膨大な数の出土品と調査の記録を蓄積してきました。

本展では、選りすぐったものもなお大量の展示品を通して、城下町の成り立ちや人々のくらしの様子を盛りだくさんに紹介しました。

そうは言っても、発掘調査は現在も進行中。今日もまた、調査地点で城下町の姿がよみがえります。



展示会場の様子

◆本展の解説パンフレットには残部がございます。六ツ門図書館展示コーナーまでお問合せてください。

## むかしのくらし展 昭和のあそび

会期：令和3年11月20日（土）

～令和4年3月21日（月・祝）

受付に座っていると、会場から声が聞こえてきました。

「あー、なつかしかねえ」

「ぼちちんって言いよったばい」

「牛乳瓶のフタでもやりよった」

「ラムネタンつち呼びよった」

メンコとビー玉の展示から、思い出話に花が咲いていました。

本展では、他にも独楽、凧、羽子板、福笑い、チャンバラ刀、万華鏡、犬棒かるた、双六、銀玉鉄砲、日光写真など、昭和の遊びの道具を

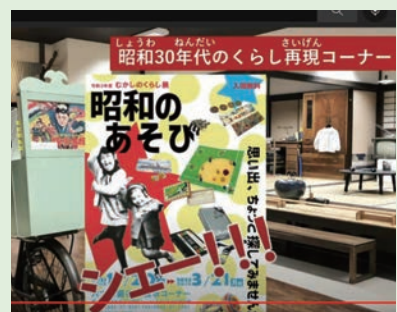
一挙に公開、当時の風景写真や地図とあわせて紹介しました。ポスターにも載せていた、ある写真の前では「シエー」の声も。

◆企画展とは別に、昭和30年代の居間と台所を再現した展示を常設しています。思い出をちょっと探してみませんか？

## 「むかしのくらし展」を Youtube で紹介！

新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、展示コーナーを一時閉鎖したり、団体見学の受入れを中止したりするなか、ご自宅や教室でも、展示や昔の道具の使い方をご覧いただけるよう「久留米市公式 Youtube」で配信を始めました。

今後もさまざまな動画を企画しています。右側のQRコードから、ぜひご覧ください。



「むかしのくらし展 昭和のあそび」の紹介動画



## ◆ 展示品紹介

### 「むかしのかぐらじ展」より

「十二支合せ」という遊びに使う札です。昭和30〜40年代の駄菓子屋で売られていたものだそうです。じつは、この文章を書いている私、十二支合せをしたことがありません。

ともあれ、箱から札を出してみると、動物の絵に、スピードやハートのマークが記されています。どうやらトランプとしても使えるようです。

すべての札を広げて見ることにしました。しかし不覚にも、十二支合せのことを一時忘れ、自分に馴染みあるトランプとして、エースから2、3、4…の順に並べ始めてしまったのです。そして、その終盤にして、ようやく違和感を覚えた私。

動物1種につき4枚ずつ

トランプは4種13枚

十二支ではない動物がいる!?

クイーンの札には、ライオンが描かれていました。はたと箱に目をやると、そこには十二支ではないライオンが大きな顔をしているではありませんか。

ませんか。

札の数は、ジョーカー2枚、無地2枚を含めて合計56枚ありました。説明書がなく途方に暮れ、絵柄を眺めていると、戌(イヌ)の札の絵は、それぞれスピッツ、フレンチブルドッグ、シーズー、秋田犬のようですが、ちょっと自信はありません。巳(ヘビ)は、コブラ、ニシキヘビ、マムシ、アオダイショウでしょうか。午(ウマ)にはシマウマもいます。描き分けられた絵柄を見ているだけでも楽しめます。



十二支合せ

肝心の十二支合せですが、花札の花合せの要領で遊ぶ場合や、動物1種4枚を先に揃えた者が勝ちの場合、また、点数の計算方法にも幾通りがあるようです。

## 六ツ門だより

六ツ門図書館展示コーナーでは、文化財保護課の情報発信の取り組みの1つとして、配布物の英訳を始めました。世界で最も使用されている言語で、より広く久留米の歴史を知っていただくためです。

さて、【松竹梅】と聞いて何を思い浮かべますか？単に3種類の植物だけではなく、めでたい物の象徴、ランク分け、それに酒の銘柄!?など、【松竹梅】が意味する事柄が浮かんだのではないのでしょうか。

歴史の文章にはこのように、歴史的・文化的な意味を持っていたり、また普段使わなかったりする言葉が出てきます。担当者は恥ずかしながら、その知識が乏しいので、言葉自体が分からないことがよくあります。例えば【久留米絣】の解説では【手くくり(手括り)】【綜統】【粗葎】など…。

この経験から英訳にあたり『多くの人に分かりやすく』を目標にしています。日本の歴史文化をあまり知らない方々や、英語が母国語ではない方々にも

伝わるよう、説明の補足や文章の簡潔化をしたり、時には観光地で耳にするかもしれない言葉(【古墳】【街道】など)はそのままに残したりしています。

実は【】であげた単語は、本市発行の『歴史散歩』に載っています。英語版は市ホームページで順次公開しています。ご興味のある方はぜひご覧ください。もちろん担当者の英訳が唯一の「正解」とは限りません。ご自身だったらどう英訳や説明をするか考えてみるのも、歴史の知識を深める一つの方法かもしれません。



(『歴史散歩』No.21 英語版・部分)

# 守り、伝える

## 久留米藩主の甲冑

### 修理後初公開

江戸時代の約250年間、11代にわたって久留米藩を治めた有馬家。市内に所在する藩主の甲冑は、10代頼永、11代頼咸の各1領のみと貴重です。このうち市が所蔵する「練革黒漆塗白糸威五枚胴具足（有馬頼咸所用）」について、令和元・2年度に九州国立博物館内文化財保存修復施設で修理を行い、令和3年度に有馬記念館の企画展で、修理後初めて公開しました。

### 《練革黒漆塗白糸威五枚胴具足》

兜鉢や胴、籠手など、一般に鉄で造る部分に練革（加工した牛革）を用い、軽くて丈夫な甲冑です。兜には、金色の角と大きな耳を持つ魅が付いています。胴や袖の裾に施された毛や威系の白と、漆の黒の対比が美しく、胴前には金銀の高時絵で龍が装飾されています。

修理前には、革の収縮によって亀裂が生じ、兜の漆塗は剥落、龍の高

時絵は剥離していました。これ以上の劣化を抑え、後世に伝えていくためには、修理を必要とする状態でした。



修理前  
(兜・部分)

### 《修理の内容》

修理に着手する前に、状態を写真撮影・記録するとともに、X線CT調査を行い、素材や構造を確認しました。

その成果を踏まえながら、修理では、剥離した箇所や高時絵を麦漆などで接着、欠損部には刻苧を充填し、再剥落を防ぐための仕上げなどを行いました。麦漆は小麦粉と生漆を混ぜ合わせた接着剤、刻苧は木の粉や繊維くずなどを漆にまぜたもので、日本の工芸品を修理する材料として長い歴史をもっています。

最先端の科学的視点と、伝統的な技術によって修理を受けた久留米藩主の甲冑。今後も適切に保存し、公開を進めていきます。



修理後  
(兜・部分)



久留米入城400年記念企画展Ⅰ「久留米藩主有馬家歴代」  
(有馬記念館)の展示会場風景

## 保存のためにできることを 屏風の点検

久留米文化財收藏館では、收藏資料の保存のため、漸次、收藏環境や収納容器の見直しを行っています。新型コロナウイルス流行の影響で、調査来館者や資料貸出が減少する中、さらに「いま、できることを」ということで、手間も時間もかかる屏風の点検を実施しました。

点検前、屏風を配架場所から運び、収納箱から取り出し、開くまでが1仕事です。現状を確認しながら、写真を撮影したり、各部分をより詳しく計測したりしました。点検後は、管理用データベースに情報を補足して、今後の保存活用にも備えます。



屏風の点検の様子



# 活かし、伝える

## 重要文化財の修理に備え 建築の歴史をさぐる

神社仏閣など、日本の歴史的な木造建築は、周期的に修理を行うことで、その姿を保ち、人々の心よりどころとして守られてきました。この建築文化を支える「伝統建築工匠の技・木造建造物を受け継ぐための伝統技術」のユネスコ無形文化遺産登録（代表一覧表への記載）は、記憶に新しいところです。

文化財の修理は、今日に伝えられてきたものをそのまま残すことに尽きます。しかし木造建築は、時間とともに劣化することは避けられません。修理では、破損や腐朽した部分だけを取り除き、埋め木などをして本来の部材を残す工夫をします。

こうした伝統の修理技術とともに、建造物の歴史的価値を維持するために重要なのは、建立から今日にいたる歴史を把握することです。建立の年代、建立以降の改造や変更、工法などを理解し、それを踏まえて

修理の方法や復元の方針を検討していくこととなります。

久留米藩主有馬家の菩提寺・梅林寺にある久留米市内最古の木造建築で、国指定重要文化財の「有馬家霊屋五棟」も、修理が必要な時期を迎えようとしています。その時に備え、霊屋の建立から今日にいたるまでの歴史をさぐるため、資料の調査を始めました。

市の収蔵資料を探してみると、霊屋五棟を含む有馬家墓所（国指定史跡）を描いた絵図や、梅林寺開山以来の歴史をまとめた記録があることが分かりました。伽藍の建立・再建の年代を記したものもあり、梅林寺の建築全体のなかで、霊屋の歴史的価値を考える糸口となりそうです。



久留米市文化財収蔵資料として保管している梅林寺関係の古記録。旧久留米藩家老・稲次家に伝来していたもの

## 古文書で紐解く、虫追い祭りの歴史

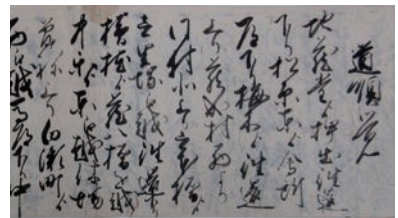
黒田俊光さんは3年前、耳納連山の風景に一目ぼれして横浜市から久留米市へ移住し、令和元～3年度の地域おこし協力隊として、田主丸地域の魅力を発信してきました。特に、村の時代から継承されてきた神事や祭りについて、TwitterやFacebookを用いた現地レポートは、田主丸の歴史文化の記録保存にもつながる活動です。

黒田さんが取材を続けている祭りの1つに、「虫追い祭り」があります。虫追いは、稲作の収穫前、松明を灯して鐘太鼓を打ち鳴らし、害虫を退治し、豊作を祈願する行事です。かつて全国各地で行われていましたが、現在まで受け継がれているのは田主丸など一部の地域のみです。田主丸では、竹と藁で作った巨大な馬と武者をかたどった人形を戦わせる勇壮な祭りで、3年に一度開催されています。前回は、令和元年11月に行われました。

次回に向けて、黒田さんは虫追い祭りの300年の歴史と伝統をより詳しく、多くの人々に知っても

らうため、江戸時代の古文書を調べることにしました。市が所蔵している竹野郡蔵八村庄屋・三浦家文書などの複数の古文書のなかに、幕末～明治時代の虫追いについて、役割分担や道具、当日の経路などを記した古文書があります。この崩し字で書かれた内容を読み解きながら、黒田さんは現在の祭りとの比較分析を進めているところだそうです。次回の虫追い祭りが楽しみです。

右) 虫追い祭りに関する古文書  
下段左) 田主丸・未来創造会議で注連縄用の稲を紹介する黒田さん  
下段右) かつばガイドツアーを案内する黒田さん・田主丸駅前にて



## 一つの作品を さまざまなシーンで

### 久留米藩領図屏風

美術工芸品の活用方法というと、まず展示公開が思い浮かぶかもしれませんが、現物を実際に見ることでしか汲み取れない描写や技巧があります。言葉に尽くせない感動は、かけがえのない経験となります。

ただし現物は、作品の材質によっては、<sup>たいしょく</sup>褪色を防ぐために照明を暗くして展示したり、公開日数を限ったりする必要ががあります。あるいは、温湿度などの展示環境が整わない場合や、いつでも見てもらえるように常設する場合は、レプリカ（複製品）を用いることがあります。デジタル技術の進化によって、各地のミュージアムでは、巨大スクリーンやオンラインで観賞を楽しむ取組みも増えてきました。

美術工芸品を含め、文化財を活用する方法が増えてきたことで、一つの作品をさまざまなシーン（場面）で、眼に留めていただけのように感じてきました。

さて、久留米藩初代藩主有馬豊氏が初めて入国してから400年にあたる令和3年、さまざまなシーンに登場した収蔵資料があります。「久留米藩領図屏風」という絵画です。

現物の展示は約10年ぶりで、「有馬の城づくり、町づくり」（会場：有馬記念館）では左隻が公開されました。現物と同様に

六曲一双に作られた複製は、「発掘でよみがえる久留米城下町展」（4頁）に続き、久留米の食と工芸品、グッズの販売も行われた「久留米入城400年記念展」（会場：福岡県庁11階・福岡よかもんひろば）、「久留米藩領文化」講座の関連展示（会場：エーピア久留米）を巡回しました。



「有馬の城づくり、町づくり」（有馬記念館）の展示風景

また画像は、久留米入城400年モノ語り第9回「城下から延びる主要街道を行く」（Web限定配信記事）の他、歴史のまち久留米ストーリーシート8「有馬の城づくり、町づくり 其の式 東部編」に掲載され、その紹介動画などにも登場しています。

「久留米藩領図屏風」の魅力は、上品な

光を放つ金箔地と、青や緑の鮮やかな色彩との対比が美しく、まず一見してその華やかさに引き込まれるところかもしれません。21万石の広大な藩領を、地図とは違って、一双という限られたサイズに巧みに収めています。見知った地名があればなおさら細部から目が離せなくなり、一歩下がってみれば久留米城下町が首都として象徴的に描かれていることに気づきます。すなわち、久留米城下町が筑後川の河川交通を擁するとともに、それぞれの街道によって藩領各地とつながり、交流拠点都市であることが良く表現されています。

江戸時代前期に描かれたこの絵画作品は、現代の私たちが久留米藩について考える時、その領域の特徴を明瞭に伝えてくれます。



歴史のまち久留米ストーリーシート7・8  
「有馬の城づくり、町づくり」紹介動画①入門編  
（久留米市公式 Youtube）は、QRコードから➡



### 【編集後記】

本市では、ご寄贈・ご寄託いただきました収蔵資料の保存活用について、様々な取組みを行っております。紙幅は限られておりますが、収蔵資料がどのように保存され、活用されているのか、さまざまな取組みについて、できるだけ具体的にお伝えできるよう、紙面の構成・レイアウトをリニューアルしました。

紙面に関するご意見・ご感想、またご寄贈のご相談も、随時、受け付けておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

### 『収蔵館ニュース』第18号

発行年月日 令和4年3月31日

編集・発行 久留米市文化財保護課  
久留米文化財収蔵館  
〒830-0037  
福岡県久留米市諏訪野町1830-6  
電話・FAX 0942-38-6194  
E-mail bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp

「収蔵館ニュース」前号（第17号）はこちらからご覧になれます。

久留米市ホームページ ➡ <https://www.city.kurume.fukuoka.jp> > 「観光魅力・イベント」> 文化財・歴史> 刊行物の案内 > 【配布物】収蔵館ニュース